

# 偽札、上海へ4回運搬

## 中野学校出身・土本さん 作戦の詳細語る

### 旧陸軍「登戸研究所」

第2次世界大戦中、中国の経済混乱を狙って秘密裏に実施された旧陸軍の偽札工作。川崎市の秘密研究所「登戸研究所」で印刷された偽札は、情報戦闘員の養成所「陸軍中野学校」の出身者が上海へと運び込んでいたことを、狛江市の土本義夫さん(89)が朝日新聞の取材に明らかにした。中野学校出身で、実際に偽札の運搬任務に携わったという。(三浦英之)

### 「後半は釜山から陸路で」

土本さんは、登戸研究所の号棟が取り壊されたのを機に、メディアの取材に初めて応じた。現在は狛江市で洋品店を経営する土本さんは「言えないこともまだまだあるが、登戸研究所が壊されたこともあり、事実を事実として残しておくべき」と語る。

44年9月に旧陸軍中野学校を卒業し、登戸研究所で偽札製造を担っていた第三科に配



土本義夫さん＝狛江市

属され、終戦までに4回、偽札を中国へ運んだ。各地でゲリラ戦や敵のスパイ活動にさらされる可能性が高く、危険を伴った極秘任務だった。

偽札を詰め込んだ重さ約40kgの木箱を計40〜60個ほど貨物列車に積み、第三科の研究員たちとともに中国へ運んだ。1回目の44年秋と2回目の同冬は登戸から列車で神戸へ。そこから船で上海に行き、現地の秘密機関に引き渡すまでに約1カ月かかった。現在の価値で約1千万円の資金を事前に渡され、自由に使えるという。

45年になると、東シナ海に敵の潜水艦が頻出するようになり、3回目の45年3月と4回目の同7月は、魚雷攻撃を避けるため門司(現在の北九州)から船で朝鮮半島の釜山に渡り、上海までは北京、南京を経由して陸路で運ばざるを得なくなった。

鉄道や軍用のトラックで運ぶ予定がうまくいかず、小型の渡河船で川を渡り、多数の

### 45億元製造、25億元流通／中国政府は早期に察知

### 明大非常勤講師・渡辺さん

942年、旧満州国(現在の中国東北地方)で陸軍の歩兵学校に入り、23歳で中野学校に入学。ロシアへの潜伏を目的とした「北方班」で

ロシヤ語などを学んだという。最初は歩き方の訓練。スパイと悟られないよう、民間人のようにさりげなく歩くよう教育された。軍隊式に「気を付け」の号令で姿勢を正すと注意され、卒業後は髪を伸ばして軍人と悟られないよう指示されていたという。

中国政府は巨額の軍費を賄おうと法幣の発行額を急増させる。37年に約14億元だった発行額が44年末には1894億元に増え、物価は日中戦争開始前の36年と比べ、44年には数十倍に跳ね上がった。1千円札や1万円札まで発行される異常なインフレとなり、日本の研究者には「5元や10元が主だった日本の偽札は無価値になった」という見方と、「戦争末期は別として、日本の偽札発行額は、開戦当初の中国政府の軍費の2、3年分に相当する。十分に効果があった」という見方がある。

渡辺さんは、戦争は武力だけではなく、情報戦や経済戦などが表裏一体となって進められたという。偽札工作に携わった人の証言や資料をいかに後世に伝えるかが大きな課題」と話している。

登戸研究所について研究する明大非常勤講師の渡辺賢二さん(67)によると、旧陸軍の偽札工作には①中国で偽札を使って物資を購入する②大量の偽札でインフレを起し、中国の財政力を弱める③の二つの目的があった。

登戸研究所資料館によると、中国政府は35年、米粟の支援のもと、各地では偽札に発行されていた貨幣を回収して統一通貨(法幣)を制定。英国領の香港やビルマを占領されると、中国政府は米国の本土からインドを経由して法幣を空輸し、対

解体が進む登戸研究所  
5号棟 川崎市多摩区

